明治期東京の近代邸宅空間における洋風庭園の様式と空間

Style and Space of Semi-western Gardens in Modernized Residential Spaces in the Meiji Tokyo

栗野 隆*
Takashi AWANO

Abstract : In the last several years, an explosion of papers argue about Japanese modern landscape, there are design of residential gardens, policies of park and landscape of resort and so on. This paper clarifies the formation period of semi-western gardens in Tokyo during the Meiji period and its spatial characteristics, particularly Shiba-niwa (lawn garden), by analyzing the trends in western house construction and relationship between building layout and garden design within premises. The result leads to the following hypothesis. The formation period of Shiba-niwa style overlaps with the period of western building construction boom around the mid-Meiji period (1882-1902). The concept of Shiba-niwa was to integrate the juxtaposed arrangement of Japanese and western buildings, typical building layout in modern residential spaces, into coherent landscapes with simple combination of spacious lawns and gently meandering paths, that is a remarkable characteristic reflecting the modernization of traditional garden design.

Keywords: Modern garden, Semi-western garden, Lawn garden

キーワード : 近代庭園, 洋風庭園, 芝庭

1. はじめに

明治期東京における邸宅庭園については、江戸期の武家地を前身として、明治新政府による土地令（1868）と桑茶政策（1869）にともなう庭園空間の荒廃から農地化に至るまでの変容、その後の皇族・華族の武家地の取得による邸宅の造営が、旧来の武家庭園を洋風造園へ改造する引き金となっていたことが指摘されている¹⁾²⁾³⁾。

また洋風庭園様式の変遷については、針ヶ谷が明治初期（明治元年～15年頃）の形骸的な洋風模倣にはじまり、中期（明治15年頃～35年頃）に至って西欧の風景式を消化して和洋折衷式の創始となり、末期（明治35年頃以降）におよんでは整形的な純洋風の勃興があったとの様式史観を示している。さらに明治期における洋風庭園様式として「芝庭」をあげ⁴⁾⁵⁾、その特徴として、①和洋折衷式のもとに明治中期に確立されたという様式形成時期、②芝生の間に心地よいカーブを描いて走る曲線園路を設けたものであるという空間形態を、すでに戦前の70年前に提示し⁴⁾、この指摘はいまや近代庭園史の通説として定着している。しかしその一方で、針ヶ谷論文は統一され普遍化された近代庭園史というべき体裁をもってはいないという見解も提示されている⁶⁾。

上記の針ヶ谷論文をへて、近年では明治期の造園関連文献や地形図、個別庭園の分析などから、明治期東京の庭園が陽あたりのよい高台を好むという立地的特徴³⁾⁷⁾、芝生・園路・背景植栽・前景植栽・捨石の5点の要素により構成される芝庭の空間的特徴に加え、芝庭の様式形成に重要な役割を担った小平義親、鈴木柯村という近代的庭園デザイナーの台頭⁸⁾が指摘されている。

芝庭が邸宅空間に出現した背景については、園遊会の開催にともない、多くの人びとが集い、散策することが可能である広々とした園地的空間が必要となった可能性、洋風建築の新設にともなう西欧庭園様式の導入の可能性など、諸説が示唆されている⁹⁾¹⁰⁾。

しかし、①芝庭という空間形態が様式として定着したのはなぜ明治中期なのか、また、②純粋な西欧様式そのままを邸宅敷地に

導入することができた建築に対して、庭園ではなぜあえてゆるやかにカーブする園路の設置によって空間を和洋折衷のもとに非対称としなければならなかったのか、という明治期における芝庭の様式形成時期と空間形態への2つの問いに対しては、明確な既往の知見が提示されていない。

明治期東京における邸宅庭園の様式論や空間論にかかわる通説については、本来は庭園とセットであるべき建築の視点が稀薄であると感じられる。すなわち、明治期における洋風庭園は邸宅空間における建築との空間構成上の関係性ともからめた検証を行う余地があると考えられるのである。

そこで本稿では、上記2点の明治期東京における芝庭の通説についての問いを庭園と建築との関係に求め、①明治期東京の芝庭を有していた邸宅空間における建築上の近代化について、その时期的動向と庭園空間におよぼした影響、②芝庭を有していた邸宅空間における建物配置と庭園との関係、の大きく2つの観点から検証し、今後の近代庭園史の構築に資する基礎的知見を導くことを目的とした。

2. 分析対象としての明治期東京における近代邸宅空間

まず本稿では、明治期東京に存在していた芝庭を有する邸宅空間を分析対象として得ようとの意図から、針ヶ谷による芝庭の概念規定⁴⁾をもとに戦前に刊行された造園・建築系の雑誌・書籍類に加え、集成本としてまとめられた先行研究も含めてその掲載の有無を総点検し（表－1）、次に①所有者（邸宅名称）、②所在地（旧15区部と郡部）、③立地（地形と邸宅空間との関係）、④敷地計画（建築と庭園との位置関係）、という基礎的データが得られる参謀本部陸軍部測量局作成の『五千分一東京図』（1884）¹¹⁾と日本帝国陸地測量部作成の『東京一万分一地形図』（1909）¹²⁾を用い、上記文献に掲載された芝庭が地形図で所在が判明するかどうか網羅的に点検した。その結果、合計25例の分析対象としての近代邸宅空間を得ることができた（表－2）。

*独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所平城宮跡発掘調査部

3. 明治期東京における邸宅空間の近代化と庭園の変容

(1) 洋館の建設にともなう邸宅空間の近代化

洋風庭園の特徴的様式としての芝庭という空間形態が定着した背景には、これを包括する邸宅空間にいかなる変化があったのかを明らかにすることがまず必要である。

皇室・皇族・華族などの特権集団が率先して文明開化のもとに近代化を推進し、衣食住にかかわる西欧的生活様式の導入により、そのステイタスシンボルとして邸宅内に洋館を構えたのは自明のことである。ここで問題となるのは、近代化のシンボルとしての洋館が邸宅空間に設けられたのがいつ頃かという時代傾向である。

分析対象とした 25 邸宅については、洋館はその約 8 割にあたる 20 例が確認でき、このなかで建設年代が確認できるものは 14 例あり、麹町区・有栖川宮邸 (1884)、赤坂区・一條邸 (1891) など、うち 10 例の洋館が明治 17 年 (1884) 以降に集中して建設されているという傾向があることが分かった。また洋館の建設年代が特定できなかった 6 例については『五千分一東京図』(1884) と『東京一万分一地形図』(1909) を用いて邸宅空間の変遷をたどった。その結果、『五千分一東京図』において測量範囲外であった芝区・原邸、北豊島郡・渋澤邸を除き、4 邸宅はすべて邸宅そのものが新規かもしくは明らかに建物配置が異なっていたため、明治 17～42 年 (1884～1909) にかけて邸宅の建築工事が行われていたことが示唆されており、芝庭は明治中期以降に形成された洋風庭園様式であるという通説と、邸宅空間における洋館建設の时期的動向とはよく符合することが分かった (表－2)。さらに麹町区・北白川宮邸、麹町区・鍋島邸など、芝庭の築造年代が特

定できる 9 邸宅はすべて洋館の建設を契機に庭園が芝庭へ新造もしくは改造されていることから、芝庭の築造年代は邸宅空間における洋館の建設年代と同時期であると指摘できる。

ただし以上の分析からは、いつの時期をもって芝庭が洋風庭園様式として確立されたのかは断定できない。しかし少なくとも、芝庭が明治中期 (明治 15 年頃～35 年頃) に様式として確立したという戦前の針ヶ谷説は支持される推論であること、また具体的に明治 17 年 (1884) 以降に数多くつくられた可能性があることだけは明らかにすることができた。

(2) 洋館建設前後の邸宅空間の敷地計画からみた庭園の位置づけの変容と芝庭の出現

明治期東京の邸宅空間における洋館の建設が庭園空間におよぼした影響を詳細に検証するため、次に具体的検討対象として、①明治期東京における芝庭を有する庭園の代表例⁴⁾、②芝庭を様式として確立した宮内省内苑寮の庭園技手・小平義親の庭園作品¹³⁾、③洋館建設前後の建物配置を地形図からたどることができ、④文書・図面・写真資料が多く残存しているもの、という 4 点の理由から小石川区・細川護成邸を取り上げ、洋館建設前後の敷地計画の比較により、邸宅空間における庭園の位置づけの変化と芝庭との関係を分析する。また、すでに近代の居住地の理想像として現在の「山手」に通ずる「高燥の場所」がよしとされた土地のブランド志向¹⁴⁾と庭園とのかかわりについての示唆¹⁵⁾がなされているため、芝庭という空間形態が主屋とともに地形上での位置にあったのかという立地にも注目する。

本邸宅には、明治 26 年 (1893) に宮廷建築家・片山東熊の設計により洋館が建設され¹⁶⁾、同時期に芝庭が整備された⁴⁾。

本邸宅の洋館建設前後の敷地計画を 2 点の地形図¹⁰⁾¹²⁾により比較すると、建設前は崖線下の低地部に主屋が構えられているのに対して、建設後は敷地が台地上部の西北方向に拡大し、主屋が台地上の平坦地に位置を変えて配され、池端には離れが設けられるという大きな違いがある (図－1)。この建物配置の違いから庭園は、洋館建設前は崖線下の池庭が主庭となっていたのに対し、建設後は台地上部に設けられた芝庭が主屋前の庭園として位置づけられていることが分かった (図－2、写真－1¹⁷⁾)。

さらに 25 邸宅の立地を 2 点の地形図を中心に検討すると、22 例が高台に立地しており、細川護成邸と同様に共通して主屋が台地上部に配され、台地上の平場から崖線の肩への方角にかけて庭園空間が設けられるという特徴があることが分かった (表－2)。

以上、洋館の建設にともなって生活空間領域が低地部から開放

表－2 明治期東京における芝庭を有する近代邸宅空間

名称	種別	所在地	立地	①主屋と②芝庭の位置関係	洋館	洋館建設年代	邸宅形式	備考
有栖川宮邸	皇室	麹町区霞ヶ関	台地上	①高台平場 ②主屋前南	●	明治17 (1884)	和洋併置	洋館：J. コンドル・庭園：小平義親。芝庭は洋館の建設により築造。明治37年以降霞ヶ関離宮。
閑院宮邸	皇族	麹町区永田町	台地端部	①高台平場 ②主屋前南	●	明治29 (1896)	和洋併置	洋館：片山東熊。
北白川宮邸	皇族	麹町区紀尾井町	台地端部	①高台平場 ②主屋前南西	●	明治17 (1884)	和洋併置	洋館：J. コンドル (一部庭園にも関与)。芝庭は洋館の建設により築造。
竹田宮邸	皇族	芝区高輪	台地端部	①高台平場 ②主屋前南西	●	明治44 (1911)	和洋併置	洋館：片山東熊・足立鳩吉・木子幸三郎・渡辺謙。芝庭は洋館の建設により築造。
阿部邸	元大名	本郷区西片町	台地端部	①高台平場 ②主屋前南	—	—	和館配置	
一條邸	元公卿	赤坂区福吉町	台地端部	①高台平場 ②主屋前東	●	明治24 (1891)	和洋併置	洋館：片山東熊。
犬養邸	政治家	牛込区早稲田	緩斜面	①平地上 ②主屋前東	—	—	和館配置	
岩崎邸	実業家	下谷区茅町	台地端部	①高台平場 ②主屋前南	●	明治29 (1896)	和洋併置	洋館：J. コンドル。芝庭は洋館の建設により築造、完成は1900年頃と推定。
大隈邸	政治家	麹町区雉子橋	緩斜面	①平地上 ②主屋前南	●	明治11 (1878)	和洋併置	庭園：鈴木柯村。芝庭は洋館の建設により築造 (明治11年頃)。
大隈邸	政治家	牛込区早稲田	緩斜面	①平地上 ②主屋前南東	●	明治20 (1887)	和洋併置	庭園：鈴木柯村。芝庭は洋館の建設により築造。明治35年に洋館を新築 (設計：保岡勝也)。
西郷邸	政治家	荏原郡目黒村	台地端部	①高台平場 ②主屋前西	●	明治13 (1880)	和洋併置	洋館：J. レスカス。
酒井邸	元大名	牛込区矢来町	台地上	①高台平場 ②主屋前南西	●	明治17～42と推定	和洋配置	
渋澤邸	実業家	北豊島郡西ヶ原	台地端部	①高台平場 ②主屋前南	●	—	和洋併置	庭園：鈴木柯村。
鍋島邸	元大名	麹町区永田町	台地端部	①高台平場 ②主屋前南	●	明治25 (1892)	和洋併置	庭園：小平義親・洋館：坂本復経。芝庭は洋館の建設により築造。
原邸	実業家	芝区高輪	台地端部	①高台平場 ②主屋前南	●	—	和洋併置	
土方邸	政治家	小石川区林町	台地端部	①高台平場 ②主屋前南	●	明治17～42と推定	和洋併置	
日比谷邸	実業家	芝区高輪	台地端部	①高台平場 ②主屋前東	—	—	和館配置	明治40年頃に邸宅竣工とともに芝庭を築造。
細川潤次郎邸	政治家	小石川区林町	台地端部	—	—	—	和館配置	
細川護成邸	元大名	小石川区高田老松町	台地端部	①高台平場 ②主屋前南	●	明治26 (1893)	和洋併置	庭園：小平義親・洋館：片山東熊。芝庭は洋館の建設により築造。
穂積邸	政治家	牛込区弘片町	台地上	①高台平場 ②主屋前南西	●	明治22 (1889)	和洋併置	洋館：中村達太郎。
益田邸	実業家	芝区高輪	台地端部	①高台平場 ②主屋前南	●	明治39 (1906)	和館配置	洋館：J. コンドル。
松平邸	元大名	四谷区般若橋	台地端部	①高台平場 ②主屋前北西	—	—	和館配置	
三井三郎助邸	実業家	小石川区安藤坂	台地端部	①高台平場 ②主屋前南	●	明治17～42と推定	和洋併置	
三井高信邸	実業家	麹町区上二番町	台地上	①高台平場 ②主屋前南西	●	明治17～42と推定	和洋配置	
山縣邸	政治家	小石川区関口台町	台地端部	①高台平場 ②主屋前南	●	明治21 (1888)	和洋併置	庭園：山縣有朋・岩本勝五郎・洋館：片山東熊。

註：邸宅の名称は『五千分一東京図』『東京一万分一地形図』の表記を原則とした。ただし所有者の異なる同名邸宅については所有者の姓名まで記載している。邸宅空間の所在地・立地・主屋と芝庭の位置関係も2点の地形図にもとづいている。洋館欄の●は当該邸宅に洋館が存在することを示す。表中の－(ハイフン)は当該事項が特定できなかったことを示す。

的な台地上部にとってかわり、高台に芝庭が共通して築造された点からは、明治期東京の邸宅庭園が高台を好むという「台地主義」ともいべき従来の知見とともに、居住地における近代の高台志向という価値観も芝庭の着想に関係していたという傍証になると指摘できる。

4. 明治期東京の和洋併置式邸宅にみる芝庭の様式と空間

(1) 邸宅の建物配置と芝庭にみる空間の和と洋

明治期東京の邸宅における芝庭が、芝生に設置された曲線園路によってその空間が非対称とされた点を建築の特徴から検証するのが本稿のスタンスであるが、ここで分析対象とした 25 邸宅における建物配置と芝庭との関係を検討する。

まず 25 邸宅のうち洋館が確認された 20 例について文書・写真・図面資料、および 2 点の地形図によりそれぞれの建物配置を点検したところ、配置の詳細が確認できなかった 3 例を除く 17 例が和館と洋館とを同一敷地に並列する「和洋併置式邸宅」となっていたことが分かった(表-2)。

明治期における和洋併置式邸宅の特徴は、洋館と和館はそれぞれ独立し、外観上は和洋両館が並んで見える点にあるとの指摘¹⁸⁾がある。この和洋両館の隣接配置が外部空間において意味するのは、邸宅空間の同一地盤上に両建築が併置されたことによる「和洋併存の風景」という近代邸宅空間ならではの、水と油のような関係の特異景観の出現(写真-2)である¹⁹⁾。このことは邸宅の前面に和洋どちらかの建物にのみ照準を合わせた庭園をしつらえた場合、もう一方の建物が園内において景観上の不協和を来す構築物になってしまうことを意味している。すなわち和洋両館前面の主庭部分が直線園路などによる西欧の整形様式や築山庭・平庭といった旧来の伝統様式だけで構想されることはないという考え方にまず十分な妥当性を認めることができ、曲線園路により空間を非対称とした芝庭が着想された背景には、和でもなく洋でもない庭園、もしくは和でもあり洋でもある庭園により和洋両建築を風景全体として同等化あるいは折衷させる必要性が生じたことに起因したのではないかと、という蓋然性の高い推論が成り立つ。

ただし本稿で調査対象とした 25 邸宅のうち、牛込区・犬養邸および松平邸、芝区・日比谷邸の 3 例は和館のみの配置となっている。これについては芝庭が、「日本式庭園に最も近似の点を有し、自然的なるを以て割合に日本人に解せられ易く、またこれを日本式建築に応用するも、さしたる不都合を認ず」という大屋の戦前の指摘²⁰⁾にあるように、芝庭が和館配置邸宅にも調和する空間であったことが、近代の特徴的庭園様式として形成される上でのひとつのポイントであったと考えられる。

(2) 邸宅の建物配置と庭園との空間構成上の関係

和洋併置式邸宅により着想された空間形態が芝庭であったとする上記の推論の傍証として、芝庭という空間形態が和館にも洋館にも調和する庭園技法であったという評価がすでに明治期に存在していたという指摘²¹⁾があるが、次に本稿では分析対象とした 25 邸宅から、すでに明治期東京における芝庭の代表例であるという造園史の評価が定まっている下谷区・岩崎邸(茅町邸)²¹⁾²²⁾を取りあげ、本邸宅と同様に和洋両館を兼備した芝区・岩崎邸(高輪邸)を比較対象として建物配置と庭園構成との関係を検討し、上記推論の検証を試みる。

茅町邸は、岩崎彌太郎の長子・久彌が米国ペンシルベニア大学の留学を終えて三菱社の副社長に就任した後に結婚することとなったが、この結婚にともなう新居の必要性が生じたために和洋両館を新築し、庭園をも改造したものである。建物の竣工は明治 29 年(1896)、庭園の完成は未確定で 1900 年頃と推定されている²²⁾。

一方高輪邸は、彌太郎の弟・彌之助が本邸として明治 33 年(1900)に整備に着手し、和館は駿河台邸から移築して洋館は新

図-1 細川護成邸にみる洋館建設前後の敷地計画の変化

図-2 細川護成邸庭園平面図(芝庭部分)

写真-1 細川侯爵邸の庭¹⁷⁾

写真-2 赤坂区・黒田邸にみる和洋併存の風景¹⁹⁾

図-3 岩崎家の茅町邸と高輪邸にみる建物配置と庭園構成

図-4 明治期東京における和洋併置式邸宅と庭園の形

築したもので、その完成は明治41年(1908)であり、庭園は洋館竣工から2～3年後の完成とされる²³⁾。

両邸とも洋館の設計者はジョサイア・コンドルであったが、新邸の建設には建物配置の考え方は大きく異なっている。茅町邸では、明治期の大邸宅の特徴である和洋両館を隣接配置とする和洋併置式を色濃く踏襲した形式がとられているのに対して、高輪邸ではこのようなスタイルを採用せずに、洋館を中心とした配置計画とし、和館は別棟として設けるという方針がたてられている²³⁾。

この建物配置の違いは庭園構成にも強く表出されている(図-3)。高輪邸では和館は敷地北限に、洋館は敷地のほぼ中央部に配置され、庭園はこの洋館に整合づけるよう、コンドル、福羽逸人、林修巳の設計による直線園路が設置された整形芝生園地やバラ園など、対称性を基調とした構成となっている。一方で茅町邸では、和洋両館が敷地北側に併置され、主庭は和洋折衷の加味された非対称を特徴とする芝庭の典型スタイルとなっており、和洋両建築を一連の庭園景とする技法として芝庭が採用された点が明快にみとれるのである。

なお、高輪邸では、和風庭園部分が崖線下の低地部に構成されているが、このような和洋の庭園を崖線により区分し独立して併置する方法は、芝区・三井邸(現・三井倶楽部庭園)など、明治後期から大正期につづく次の近代庭園様式といえよう。

5. おわりに

以上の分析・考察から本稿の導入部で提示した明治期東京の近代邸宅空間における芝庭の様式形成時期と空間形態への問いに対しては、次のような知見および推論を導いた。

まず、芝庭という空間形態が様式として定着したのがなぜ明治中期なのかということについては、邸宅空間における洋館建設ラッシュの时期的動向が明治中期であり、芝庭がその洋館の建設にともなって築造されたからである、という知見を導くことができた。また確証はもてないが推察されることとして、本稿では中期のなかでもとりわけ明治17年(1884)以降に芝庭が数多くつくられた可能性を提示することができた。なお、この具体的な年代は近代建築史における様式変遷の争点ともなっている明治17年(1884)に発布された「華族令」による特権集団の飛躍的な増加ともからめた検討の余地がある。

また、純粋な西欧様式を邸宅敷地に導入できた建築に対して、庭園ではなぜゆるやかな曲線園路の設置によって空間を和洋折衷のもとに非対称としなければならなかったのかということについては、次の考え方を導いた。つまりそれは、和洋併置式邸宅により生成された和洋併存の風景に対しては、和でもなく洋でもない、もしくは和でもあり洋でもある庭園の必要性が生じた点にまず芝庭が着想された前提条件をみることができ、空間を非対称とするゆるやかな曲線園路が芝庭の特徴的意匠として採用されたのは、その和洋併存の風景を同等化もしくは折衷させるためのしつらえとして重要な役割を担ったからではないであろうか、という推論である(図-4)。

さらに、居住地の近代的高台志向が芝庭の出現とも関係している点については、その傍証として邸宅と芝庭が一連で台地上部に立地する傾向を導いたが、この詳細分析は今後の課題としたい。

近代東京では、赤坂区・根津邸(現・根津美術館庭園)などの近代和風庭園や北豊島郡・古河邸(現・旧古河庭園)に代表される和洋併置庭園など、実に多くのタイプの庭園が存在しているがその全体像は未解明である。本稿ではそのなかでも和洋折衷の芝庭という庭園の一様式を取り上げたにすぎない。今後はいろいろの近代庭園を体系的・系統的に整理し、さらには近代別荘地や郊外住宅地の庭園についても調査対象としていきたいと考える。

なお、本稿は平成16年度東京農業大学大学院高度化推進特別経費による研究成果の一部である。

註

- 1) 飛田範夫(1985): 明治時代の庭園: 「作庭記」からみた造園 所収: 鹿島出版会
- 2) 仲隆裕(1998): 日本庭園の喪失と洋風庭園の導入: 庭園史をあるくー日本・ヨーロッパ編 所収: 昭和堂
- 3) 栗野隆・服部勉・進士五十八(2002): 明治期東京における庭園空間の成立と構成: ランドスケープ研究 65(5), 379-382
- 4) 針ヶ谷鍾吉(1934): 明治時代の洋風庭園: 造園雑誌 1(2), 93-101
- 5) 針ヶ谷鍾吉(1995): 大隈重信の余業: 東京農業大学出版会(針ヶ谷は芝庭の先駆的事例として麹町区・大隈邸をあげている)
- 6) 鈴木誠(2004): 近代造園遺産に関する研究(1)近代造園遺産評価の視点: 日本造園学会関東支部事例研究報告集(22), 9-10
- 7) 田中正大(1987): 近藤正一と明治の庭園: 造園の歴史と文化 所収: 養賢堂
- 8) 栗野隆(2003): 明治時代における庭園の様式と空間: 平成15年度日本造園学会全国大会シンポジウム・分科会講演集, 129-132
- 9) 進士五十八(1985): 明治大正時代の庭園: 造園用語辞典: 彰国社
- 10) 鈴木誠(1998): 庭園デザインの系譜: ランドスケープ大系3 ランドスケープデザイン 所収: 技報堂
- 11) 参謀本部陸軍部測量局(1884): 五千分一東京図(測量原図): 国土地理院所蔵: 日本地図センター複製
- 12) 日本帝国陸地測量部(1909): 東京一万分一地形図: 明治・大正・昭和東京一万分一地形図集 所収: 柏書房複製
- 13) 田村剛(1942): 山縣有朋公と庭園: 庭園 24(5), 172-177
- 14) 鈴木博之(1999): 都市へ: 中央公論新社
- 15) 栗野隆(2004): 近代造園遺産に関する研究(4)近代の庭園に関する近代の文献: 日本造園学会関東支部事例研究報告集(22), 15-16
- 16) 日本工学会編(1927): 明治工業史 建築篇
- 17) 近藤正一(1910): 名園五十種: 博文館
- 18) 内田青蔵(1992): 日本の近代住宅: 鹿島出版会
- 19) 建築雑誌第150号: 芝庭の先駆的事例である麹町区・大隈邸よりも時期がさかのぼる和洋併置式邸宅の庭園古写真。洋館は明治7年(1874)に建設。和洋両館前面には芝生の園地的空間が確認されるが、洋館は庭園側に扉開口部は確認できず、和館の縁に設置された二石の杏脱石からは庭園に園路設定はなされていない。和洋両館がそれぞれ独立した風景をなした芝庭の原初的形態をみてとれる。撮影時期は明治32年(1899)以前。
- 20) 大屋霊城(1920): 庭園の設計と施工: 裳華房
- 21) 栗野隆・服部勉・進士五十八(2003): 旧岩崎邸庭園(1900年頃～1945年)の構成と意匠: ランドスケープ研究 66(5), 385-388
- 22) 栗野隆・服部勉・進士五十八(2000): 旧岩崎久彌本邸庭園の造園生活史的研究: 東京農業大学農学集報 45(1), 78-87
- 23) 岩崎彌太郎・彌之助伝編集委員会(1971): 岩崎彌之助伝(上)